

市民公開講座

地域がん診療連携拠点病院



緩和ケア病棟開設10周年記念講演

11月8日（土）ライフケアセンターやすらぎホールにて第6回市民公開講座を開催しました。当日は朝からあいにくの雨で参加者の皆様が会場に来られる時間帯の天候を心配していましたが、お陰様で雨も止み235名もの多くの方に参加していただきました。

植田副看護部長の「緩和ケア病棟 10年の歩み」の講演に続き、書籍や新聞でおなじみの野の花診療所 徳永進先生に「いのちの巡り」という題で特別講演をしていただきました。



岡山済生会総合病院 副看護部長 植田 洋子

「緩和ケア病棟10年の歩み」

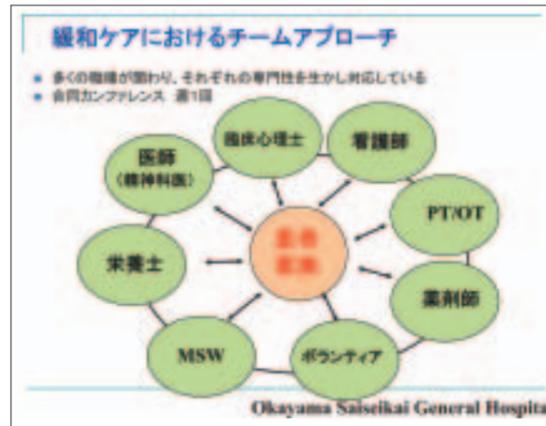
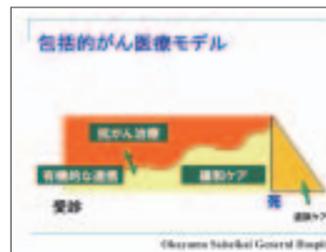
以来、さまざまな準備をして平成10年7月に、全国で43番目、中国地方の総合病院では初めて開設されました。当時は、増え続けるがん患者さん、特に末期がん患者さんの苦痛緩和の重要性が認識され始めた頃でした。今では全国に184施設3,596床のホスピスがあります（平成20年7月）。

緩和ケア病棟ではボランティアが約60名活動しており、日々の花の水換えや週3回のティーサービスをはじめ、毎月「クリスマス会」「お花見」「夏祭り」などのイベントを開催しています。病院ボランティアも10周年を迎えました。

緩和ケアもこの10年で変化してきています。患者さん・ご家族のニーズに応じていくために、入院だけでなく、どこに居てもだれもが受けられることが目標にされてきました。タイミングを見計らって在宅への支援をしていくことも重要です。緩和ケア外来もなるべく多くの

方に対応できるよう診察時間を見直し、緩和ケア相談も休日以外はお受けできる体制にしました。さらに「緩和ケア」って、どういうところで、どんなことをしているのか、一般の方に知っていただく活動をこのような市民公開講座や研修会など機会があることにスタッフが参加して、広報に努めてきました。この10年で外来患者3,502名、入院患者1,662名（新入院1,403名）でそのうち約20%の方が軽快退院されています。平成19年度の平均在院日数は約30日でした。

緩和ケア病棟は、決して特別などころではありません。痛みを和らげ、最期までその人らしく生きられるお手伝いをさせていただいています。一人ひとりの人生の総決算のお手伝いの中から、家族の絆や愛情の素晴らしさを教えていただき、ケアする私たちも多くのことを学ばせていただいたことに感謝の気持ちで一杯です。



多くの方にご参加いただき、誠にありがとうございました。次回も皆様に喜んでいただけるような市民公開講座が開催できるよう準備を進めていきたいと思っております。



「いのちの巡り」

野の花診療所 徳永 進先生

りから学ばれた死生観をお話してくださいました。

人は亡くなる時に息を吸い込んだまま死ぬのか？ 吐き切って死ぬのか？ ということから、息を引き取るということは（あとに残される者が）息（いのち）を引き継ぐ、そしていのちは巡っていくということをお話されました。また、先生は「死ぬときは慌てなくていい、どうぞ死んでください」「死ぬことは大したことではない、生まれてきたことの方が大変なこと」「命の存在はありがたいこと、不思議なこと」などとお話されました。そし

て死が特別なことではなく、つい隣に行くようなものだ。また、人の一生を飛行機のフライトになぞらえ、生まれてから徐々に高度を上げ、安定した飛行を続け、ある時期から徐々に高度を下げ、地面に着地する。この着地が「死」だとも言われました。この着地がうまくいくような援助が必要だとお話されました。

「死」という暗く重いと思われがちなものを終始、参加者の笑いを誘いながら明るく講演され、また、最後に吹かれたハーモニカの音色はこころに染み入るようでした。